

第7章

「社会のための科学」のまとめ

永山 國昭

nagayama@nips.ac.jp

総合研究大学院大学生命科学研究科教授、生理学研究所

政府は経済界とともに声を大にして「科学技術立国」を唱えている。ひと昔の“Japan as No.1”の世界的評価が一転地に落ちたかに見える現在、日本は知的資源の活用なしに再生不可能であるというのが多くの日本人の共通認識だろう。ただしこの認識は為政者に近いほど深刻の度と思い込みの度を増すようにも見える。日常生活にさして不便を感じず不満のない平均的日本人はむしろ心の底に過度な科学技術発展への警戒感を隠し持っているようにも見える。それは私自身の中にもある「現状でいいではないか」という思いと呼応する。

こうした日本の現状認識の上に吉川弘之会長に率いられている日本学術会議は科学者コミュニティのあり方を思いきった改革を迫ろうとしている。このコミュニティの identity を支えていた「科学至上主義＝科学のための科学」に対する根本的な挑戦である。科学それ自体の善を疑う姿勢である。それは一言「社会のための科学」という標語で要約される。

この新しい動きはある意味で生みの親たる人間の制御を大きく逸脱し、一人歩きしようとしている科学に対する人文主義運動でもある。その意味で「社会のための科学」の視点は科学とは何かという根源的問いを「科学のための科学」にも投げかけている。そこに日本学術会議のもう1つの潮流である「学問の再編成」の問題がからみ、両者が微妙にからみ合いながら前進している。

今回のミニワークショップは総研大の共同研究「科学と社会」が日本の中のこうした動きを正しく理解し研究会の共通認識を深めるために企画された。演者と演題は以下の通りである。

1. 中島尚正（放送大学）「科学は必要とされているか」
2. 中島貴子（東京大学）「リスク社会における食の安全と科学」
3. 吉田民人（中央大学、学術会議副会長）「大文字の第2次科学革命…大文字のパラダイムの6つの転回」

まず中島尚正氏は現学術会議会長吉川氏の提唱する人工物工学を継承し、そのセンター運営、学問興隆の先頭に立ってきた方であり、最も早くから科学者として「社会と科学」の問題を実践してこられた。人文科学者として「社会と科学」問題の先鋭的表現であるSTS（科学、技術、社会）の立場から事例研究として中島貴子氏からの報告が続く。森永ヒ素ミルク事件等にあらわれた「科学と社会」の鋭い対立関係が浮き彫りにされている。そして最後に現在の学術会議の学術再編成運動の推進役である吉田氏に「科学」のそもそもの中味の学問論的変遷を語ってもらう。近年の生命科学、情報科学の急速な進歩が旧来の学術の見方、ひいては自然認識に変容を迫っているという革新的提言である。それを氏はニュートンから始まる近代科学革命に対置する大文字の第2次科学革命と名付けている。文理分断問題、認識と実践の乖離問題を全く新しい地平から再構成し、現在の学術会議の種々の運動の理論的基盤を与えている。

3人3様の「科学と社会」への取組みだが、記録にもあるように、深くかつ包括的な論を展開しており、本共同研究に対し大きな示唆を与えているように思われる。ミニではあったがマクロ的視点を失わない、有意義なワークショップであった。

研究会概要

日 時：2002年3月18日（月）午後1時～6時

場 所：蔵前工業会館（東京・港区）

講 師：

永山 國昭（企画・まとめ）（総研大生理科学専攻・生理学研究所）

中島 尚正（放送大学）

中島 貴子（東京大学）

吉田 民人（中央大学）

参加者：※所属は研究会当時のものです

保坂 直紀（読売新聞科学部）

高岩 義信（総研大素粒子原子核専攻・高エネルギー加速器研究機構）

柳本 武美（総研大統計科学専攻・統計数理研究所）

合庭 惇（総研大国際日本研究専攻・国際日本文化研究センター）

林 衛（科学ジャーナリスト）

神沼 克伊（総研大・国立極地研究所名誉教授）

島村 英紀（北海道大学地震火山研究観測センター）

中川 尚子（医療ジャーナリスト）

井口 春和（総研大核融合科学専攻・核融合科学研究所）

藪 玲子（科学と社会を考える土曜講座）

鄭 躍軍（総研大生命体科学専攻・統計数理研究所）

有本 建男（内閣府大臣官房審議官・科学技術政策担当）

柴崎 文一（総研大）

平田 光司（総研大、共同研究「科学と社会」代表者）